

# 大和川を守る

## — つけかえとその後 —

2007年9月25日～12月9日

### 柏原市立歴史資料館

大和川。わたしたちは、この川を何気なくながめていますが、大和川は、わたしたちを洪水から守るだけでなく、豊かな自然とともに、わたしたちにやすらぎを<sup>あた</sup>与えてくれる川でもあります。そして、この川は、むかしからたくさんの人の知恵と努力<sup>ちえ どりよく</sup>によって守られてきたのです。

むかしから洪水<sup>こうずい</sup>をくりかえしてきた大和川は、今から300年ほど前につけかえられました。つけかえは、たいへんな工事だったようですが、どうして川をつけかえなければならなかったのでしょうか。また、どのようにして川をつけかえたのでしょうか。そして、その後<sup>ご</sup>はどのように川を守ってきたのでしょうか。ここで、それらについて考えてみましょう。

#### つけかえまでの大和川

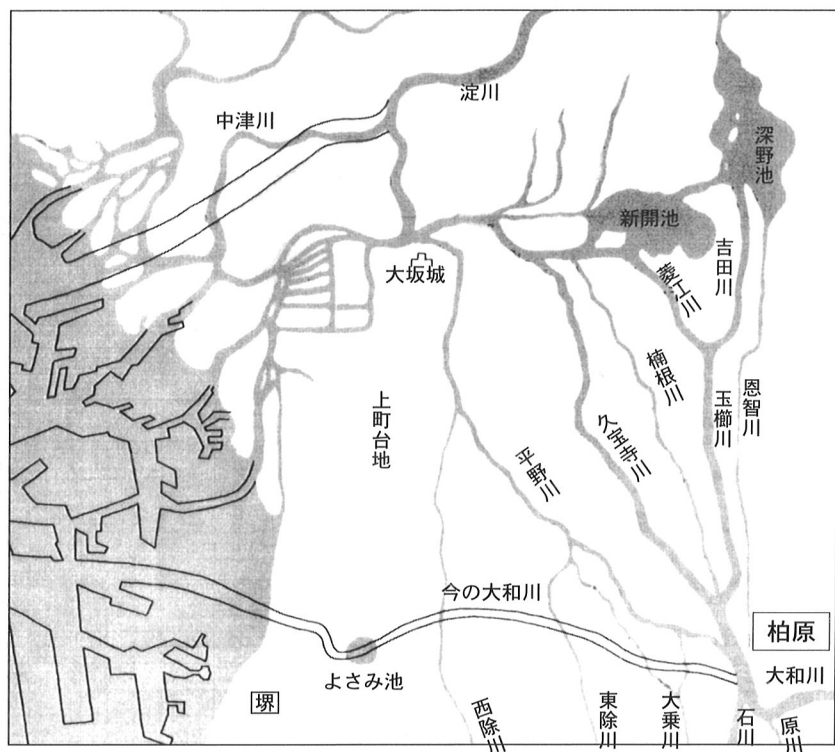
つけかえまでの大和川は、久宝寺川<sup>きゅうほうじがわ</sup>（長瀬川<sup>ながせがわ</sup>）や玉櫛川<sup>たまくしがわ</sup>（玉串川<sup>たまくしがわ</sup>）など数本の川に分かれ、大坂城の北<sup>よどがわ</sup>で淀川（大川）に流れこんでいました。しかし、大雨になると水がうまく流れず、堤防<sup>ていぼう</sup>が切れたり、堤防<sup>ていぼう</sup>から水があふれたりして、たびたび洪水<sup>こうずい</sup>をおこしていました。くりかえされる洪水<sup>こうずい</sup>に、人々は苦しみ、大和川をつけかえてほしいと願う運動が始まりました。

しかし、いつまでたってもつけかえてもらえませんでした。それは、つけかえに反対する人たちがたくさんいたからです。反対する理由は、新しい川ができると自分たちの土地がなくなるかもしれない、それまでなかった洪水<sup>こうずい</sup>が起こるようになるかもしれないなどでした。それでも洪水<sup>こうずい</sup>はひどくなるばかりで、ようやく元禄<sup>げんろく</sup>17年（宝永元年・1704）につけかえ工事がはじまりました。

#### 大和川のつけかえ

2月にはじまったつけかえ工事は、10月に完成<sup>かんせい</sup>しました。今のような機械もない時代に、わずか8ヶ月で、あの大きな大和川を作ったのです。川の幅<sup>はば</sup>180m、長さ14.3km、堤防<sup>ていぼう</sup>の幅20m以上。毎日1万人以上の人をはたらき、7万両以上のお金がかかったようです。1両を20万円として計算すると、140億円ほどのお金がかかったことになります。

大和川のつけかえを願って運動をしていた今米村<sup>いまごめむら</sup>（今の東大阪市）の中甚兵衛<sup>なかじんべえ</sup>は、つけかえ工事も活躍<sup>かつやく</sup>しました。そのときに甚兵衛<sup>じんべえ</sup>が着ていたという陣羽織<sup>じんぼおり</sup>が残されています。このようにして、洪水<sup>こうずい</sup>で苦しんでいた人々は救<sup>すく</sup>われることになったのです。



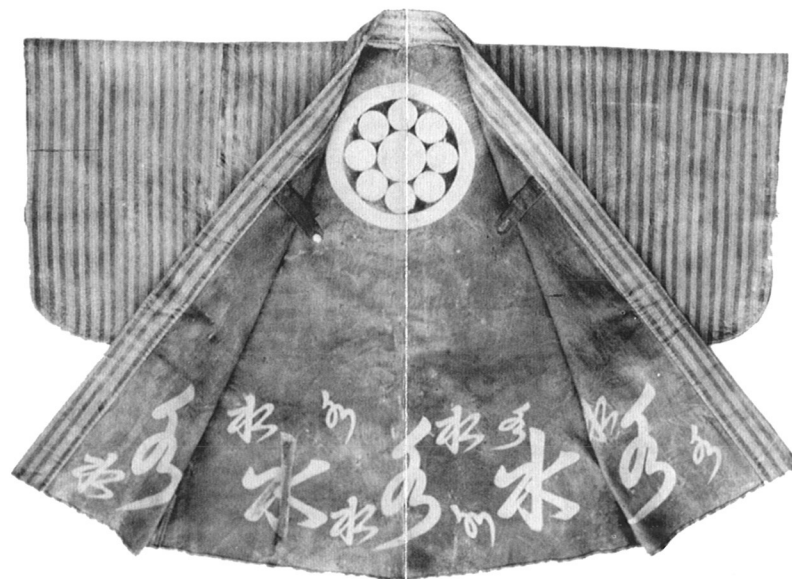
つけかえ前の大和川

つけかえまでの大和川は、数本の川に分かれて、北または北西に流れていた。これらの川は、大坂城の北で1本に集まり、もとの淀川（今の大川）に流れ込んでいた。また、今の大東市から東大阪市にかけて深野池や新開池という大きな池があった。



つけ替え嘆願書 (N-070601)

貞享4年(1687)に、大和川の流を流をつけかえてほしいとお願ひした文。毎年のようにおこる洪水に苦しみ、このままでは餓死するしかないとお願ひしている。しかし、つけかえは認められず、これ以後は、つけかえをあきらめて、川の水が流れやすくなるような工事をしてくださいというお願ひに変わっていく。



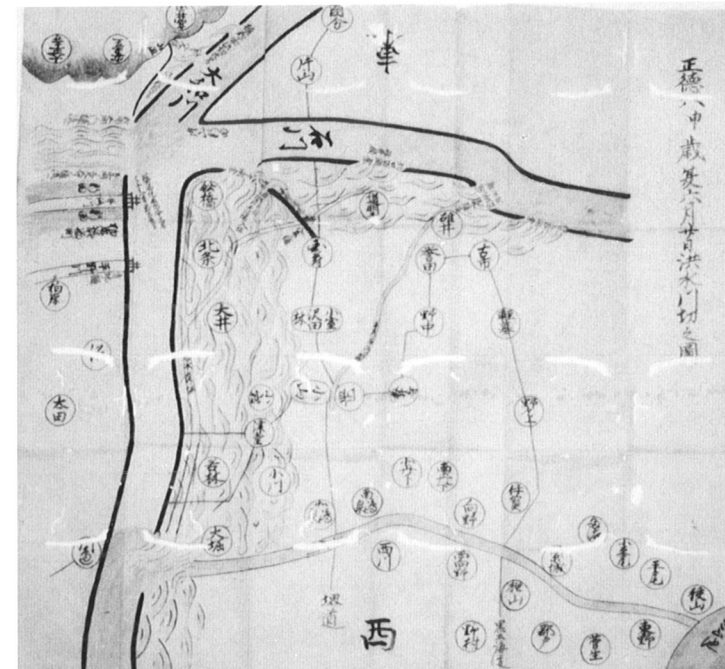
中甚兵衛着用の鹿革陣羽織 (N-070602)

中甚兵衛が、つけかえ工事のときに着ていたと伝えられる陣羽織。鹿の革で作られた、着物の上に着る上着である。その内側に3種類の字体で「水」と書かれており、新大和川に水がうまく流れるようにといひの中甚兵衛の思ひがこめられているようである。



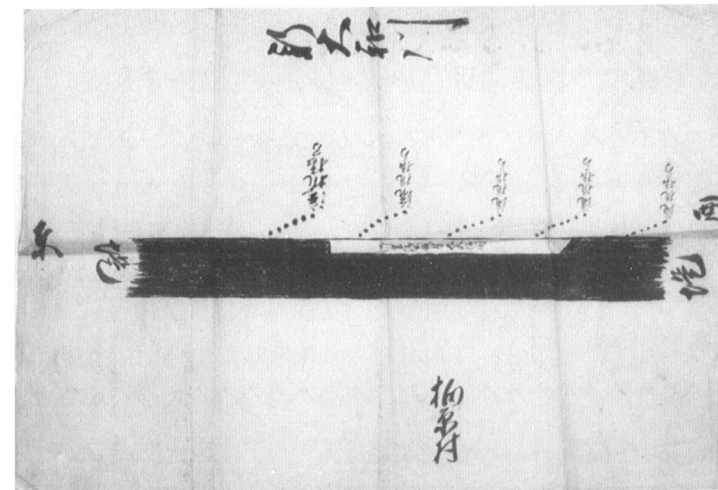
中甚兵衛肖像画 (N-070603)

中甚兵衛の姿を描いた絵。大和川のつけかえが行われた次の年、甚兵衛は67歳で出家した。この絵は、その後描かれたものである。出家とは、僧(お坊さん)になることであり、そのため頭の毛も剃っている。



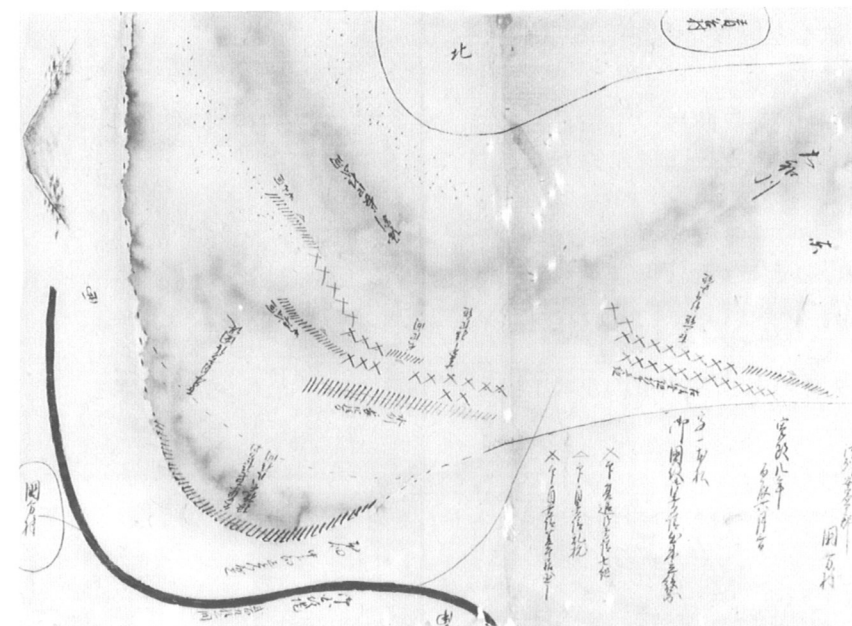
「洪水川切之図」(藤井寺市立図書館蔵)

正徳6年(享保元年・1716)の洪水のようすを描いた絵図。築留・石川・東除川の堤防が切れたことがわかる。とくに大和川の南側、現在の藤井寺市付近の被害が大きかったことを示している。



新大和川流杭配置絵図

長さ50間(90m)にわたって堤防の土を積みなおし、川に杭(流杭)を10間(18m)の長さで5ヶ所に打ったことを記録した絵図。



御国役御普請出来たて立絵図(個人蔵) 寛政8年(1796)、大和川が大きく曲がる部分に、堤防を守るために杭を打ったり、菱牛をならべたりしたことを描いた絵図。菱牛とは、数本の木材をピラミッドのように組み合わせたものである。

## つけかえ後の大和川

もとの大和川の川原には、田や畑がつくられました。これを新田といい、そこで作られた綿は、河内木綿として全国に知られるようになりました。しかし、こんどは水不足でこまるようになりました。一方、新大和川の周辺に住む人々は、土地を失ったり、村が川の両側に分かれてしまったり、それまでなかった洪水がおこるようになったりして、こまることが多くなりました。

## 川を守る

新大和川の周辺の村には、堤防を守るとい仕事も増えました。もし、堤防が切れてしまうと、自分たちの村はもちろん、大阪が大洪水になってしまうからです。そのため、堤防が崩れそうなところをなおしたり、堤防にあたる水を弱くするために川の中に杭を打ったりして、堤防を守りました。堤防を大きくする工事もなにか行われました。それでも、大和川は何度も洪水をおこしています。今でも、大和川の北側の堤防が切れてしまうと、大阪平野が水の中に沈んでしまうことになりはなりません。

また、大和川の環境を守ることも大切になっています。いつのまにか、大和川は日本で1・2位を争う汚い川になってしまいました。そのため、大和川の環境を守るためにいろいろな努力が重ねられ、大和川の水は少しずつきれいになってきました。鳥や魚、虫たちも少しずつもどってきています。50年前までは泳げたという大和川。その美しさをとりもどさなければなりません。

たくさんの人たちが守ってきた大和川。これからは、わたしたちが守らなければなりません。洪水だけでなく、自然環境にも目を向け、みんなで大和川を守っていきましょう。

—文化財講演会のおしらせ—

### ビデオ上映と講演「人工の川、大和川に自然はあるのか」

大阪市立自然史博物館学芸員 中条 武司 氏

2007年10月28日(日) 13:30～15:00 柏原市立歴史資料館研修室にて

・このリーフレットは、2007年9月25日から12月9日まで開催する秋季企画展「大和川を守る」に伴って作製したものです。  
・中甚兵衛関係資料は、中九兵衛氏の所蔵資料です。「洪水川切之図」は、藤井寺市立図書館の所蔵資料です。

## 柏原市立歴史資料館

〒582-0015 大阪府柏原市高井田 1598-1

TEL 072-976-3430

月曜休館、入館無料



つけかえ地点の風景